

# 機械翻訳の問題点

宮 井 敏

- I 英訳作業が中心となる理由
- II Semantics に基づく翻訳
- III Pragmatics による翻訳

## I 英訳作業が中心となる理由

自国語を外国語に、また外国語を自国語に翻訳する作業を自動的にコンピューターによる機械操作によって行なう技術が開発され、その一部は日本でもすでに実用に供されている。日本の場合は、カナダ、ベルギー、スイスなどのような複数言語を公用語とする国々とはちがって、また、ヨーロッパ諸国間のように相互翻訳を可能にする状況がないために、ここでは「日本語を英語に」(英訳) 翻訳する機械翻訳の問題をとり上げて考えて見ることにした。

もともと日本は言霊(ことだま)の幸(さき)わう国であり、又、明治以降は翻訳の幸わう国でもあったわけで、毎月書店の新刊書コーナーには膨大な冊数の翻訳書がならんでいる。1985年度版「ユネスコ文化統計年鑑」の「出版国別・主要語別・翻訳書数」によれば、アメリカにおける翻訳書出版点数1390点にくらべて、日本での翻訳書は1968点となっている。そのうち英語からのもの(主としてアメリカ刊行のもの)は1420点となっており、「英語から日本語へ」(邦訳)のプロセスを機械化しようというニ

ーズは少なからず潜在している筈である。それにもかかわらず、後にのべる機械翻訳作業の技術的限界から、作業の対象が限定されるために、いわば外国文化の輸入業務は企業化されるほどの需要を持ち得ないのが現状である。

ところで、英語英文学を専攻しなかった大卒の一般社会人の平均的な英語読解能力はふつう云われている以上に高いのではないか、と思われるふしがある。たとえば、James Clavell の *Shōgun* (McClelland & Stewart Ltd., 1975, N. Y.) の場合を考えてみよう。戦後30年間に積み重ねられたアメリカ人の対日理解の総量とほぼひとしい情報をこの一作で与えた、とまで云われたこの作品は paperback, hardcover 合わせて800万部を売り切ったと云われ、1980年9月に五夜連続、全十二時間にわたって放映されたそのテレビドラマは最高69%に達する驚異的な高視聴率をあげ、のべ一億三千七百万人のアメリカ人が見たとされている。そしてその邦訳『将軍』(宮川一郎訳, TBS ブリタニカ社, 1980, 東京)は六十三万部の売れ行きを示し、1981年3月、朝日テレビで八夜連続で放映された時には平均視聴率27.6%を示したといわれている。問題はこれと平行して平易な英語で書かれた原著が日本国内の洋書取次店でとぶような売れ行きを示したことである。原作の話題性とテレビ放映に刺激されたものであろうが、ともかく、翻訳書があるにもかかわらず相当数の人間が原書で読もうとした事がうかがえよう。

一方、ベトナム戦争当時のアメリカの苦悩を描いた *Best & Brightest* でピューリッパ賞を得た David Halberstam の近著 *The Reckoning* はすでに全米の best seller になっているが、日本ではその邦訳が本年六月『覇者の驕り—自動車・男たちの産業史—』(全二巻, 日本放送出版協会)と題して出版されたが、さきの *Shōgun* の例にならったものか、邦訳と平行して日本の洋販出版(東京)とアメリカの Avon Books Co. (N. Y.) の共

同出版で英語版 paperback が出され、すでに初版一万部を売り切ったと云われている。

中間的な形態としては評論家栗田勇氏が富士通経営研究所で行なった日本文化を論じた講演をまとめた『雪月花の心』は英訳の *Japanese Identity* と題した部分と対訳の形にして合本で祥伝社（東京）から出されたが、初版一万五千部を完売したと見られている。

以上、従来とは少し形のちがった日米間翻訳事情の最近を示したが、ここで云える事は膨大な翻訳文献がある一方、これと平行して原語からダイレクトに information を求めようと云う少なからぬ需要が存在すると云う事である。ところが、問題はこうした二つのチャンネルを通ず文化輸入現象の対極となる輸出作業となると、極端な程の入超となっていることである。さきのユネスコ文化統計年鑑を再び引用すると、アメリカでの翻訳書1390点のうち日本語からのもの52点、日本での翻訳書1968点のうち英語からのもの1420点と云うことになる。経済的には輸出尊重、文化的には輸入偏重と云うのが明治以来のお国柄なのであるが、これについてもさまざまな理由が上げられよう。

外国語を日本語に移し替える際に、日本語には語彙の豊富さ、表現の多様性があり、巧拙はさておき、何とか大意の通る程度には邦訳しうるものなのである。加うるに、その訳文が多少わかりにくくても、その背後にある英文を漠然とながら想像する程度の理解力は個々人が永年やって来た英文訳読の際の悪戦苦闘でだいたい身につけている。ところが、その逆となると日本人一般の、いわゆる英作文の平均的レベルは決して高くない上、日本文化の独自性、日本語構文の特異性がわざわざいって、邦訳にくらべて英訳はさっぱりと云う人が少なくないのである。それぞれが専門とする職業上の文献ならば何とか原文から大意をつかむ事の出来る人のパーセンテージに対して、その逆となると控え目に見て百分の一以下になるのではな

かろうか。きまりきったフォームをもつ英文のビジネス・レターはさておき、自社製品のカタログの英訳はおろか、ごく簡単な短い日本語の文章でも、さて英訳するとなると、自分自身が大まかながらも大体理解すればよい邦訳と、相手に正確に伝達しなければならない責任のある英訳とではかなりの違いを生ずる。推定しておよそ年間一千万ページ、コストとして二百億円が現実<sup>1</sup>に訳され、支払われている、といわれているのもその辺の事情を物語っていよう。さまざまな誤解、偏見、期待過剰の中から、極めて制限された範囲内ではあるが、まず英訳の機械翻訳がすすめられて来た背後にはこうした事情が横たわっていたわけである。

## II Semantics に基づく翻訳

ところで、言語と云うものはそれが用いられる言語領域から生み出される固有の文化の集中的表現であるから、極度に抽象化された数字、符号とは違って、固有のニュアンスと陰影、含意をさけがたく持つものであり、本来の意味からは他文化の言語へ移し替える事は不可能な筈のものである。とりわけ、言葉そのものに依存する芸術である文学作品などでは、言葉のしゃれ、地口、その文化にしかない単語、などの例を引くまでもなく、完璧な翻訳があり得ぬ事は自明の理であろう。それでも、登場人物の性格描写や、メイン・プロット、サブ・プロットのからみ合いで展開する小説ではかなりの程度まで翻訳によって異和感なく読了、理解が可能であり、その背後にある外国の文物に接することも出来よう。明治期の外国文学の殆どが訳者の大胆な翻案、抄訳によって紹介された事が一つの見識であった事がわかろうと云うものである。その上、日本語の語彙や文体そのものがこれに影響されていわゆる翻訳文体という新しいスタイルが流行

1 日本電子工業振興協会『機械翻訳システムの調査研究』(1982: 3月)

した事も、翻訳小説の読者層の拡大にあづかって力あったものと思われる。

ところが、韻律をもち、言葉のもつ情緒や音のひびきに依存する詩となると、実際には直接原語に当るしか接近の方法はない筈である。それにもかかわらず明治期の文学者たちは西洋近代詩の名作を直接日本語に移して、日本の現代詩に伝統的な和歌俳句とは違った強い刺激を与える事を志ざした。とりわけ、森鷗外を代表者とする新声社同人による訳詩集『於母影』、上田敏による『海潮音』は明治期の日本詩壇に大きな影響を与え、その後の日本新体詩の二大源流となったとされている。上田はこの訳詩集の序文で「かのいわゆる逐語訳は必ずしも忠実訳にあらず」と言い、「海外の新声をなつかしきわがやまとの言葉に移さん」とのべている。収められた海外29人の詩人の57篇の訳詩の中でも、不朽の名訳といわれる Paul Verlaine (1844-96) の処女詩集 *Poèmes staurniens* (1866) 中の一篇 *Chanson D'automne* にその実例を見てみよう。上田の云う「逐語訳」を原詩から試みてみると、

秋のヴァイオリンの長い囁き泣きは、やつれて物憂い私の心を傷ましめる。

時禱の鐘の鳴る時は、蒼ざめ果て、胸苦しくも昔の日々を思い出して涙を流す。

そして私は意地悪く吹きつける風をうけて枯葉のようにあちこちへと運ばれて行く。

となる。これを上田訳にみると、「枯葉」と題して、

秋の日のヴィオロンのためいきの、身にしみてひたぶるにうら悲し。

鐘のおとに胸ふたぎ、色かえて涙ぐむ過ぎし日のおもひでや。

げにわれはうらぶれて、こゝかしこさだめなくとび散らふ落葉かな。

とある。流れるような原詩のリズム、高度に高められた言葉の音楽性、と

りわけ aab, ccb, aab; ccb, と三たびくり返される各行末の脚韻などは到底日本語に再現不可能のものではあろうが、それでも、原詩と上田訳とを詩として較べて見て、「いづれ劣らぬ、いや、ひょっとして邦訳のほうが上かも」と思った日本の仏文学者も決して少なくはない筈である。

そもそも、翻訳という作業において、原文そのものを100%忠実に伝える事が事実上不可能である以上、原文のもつ効果に至近の効果を読者に与える事しか出来ないわけである。そしてその効果のとらえ方が全く主観に属するからには、これはポール・ヴェルレーヌという詩人の詩を上田敏がこう感じたと言う独自の表明であり、「秋のうた」と題する原詩を土台として上田は「枯葉」と言う題の己の詩をうたったのだ、と云う見方も可能であろう。それでもなお、訳詩を通して原作者から日本の読者へ伝達されるあるもの、つまり詩的效果の存在は認めざるを得ない。これを翻訳技術上 communication load 伝達荷と呼んでいるが、客観的な論理を度外視した純粋に主観の領域に属する韻律詩の場合、この伝達荷の把握もまた各人各様のものではあろう。が、それを認めた上で、フランス象徴詩の傑作を日本に初めて紹介したこと、それに大きく刺激されて日本の新しい新体詩運動が一段と飛躍したことは、仏文学者河盛好蔵、比較文学者島田謹二等、専門家の指摘をまつまでもなく、万人のみとめるところであろう<sup>2</sup>。大方の見るところ、この場合伝達荷はまず100%伝達された、とみてよいのではなかろうか。20世紀初頭、まだフランスに於てすら充分評価の定まっていなかった象徴派詩人を、何の解説、注釈、文壇消息もなしに、全く独自の見解から取上げて、詩形の定まっていない日本新体詩の黎明期に、五文字のリピート六回を以て一聯とし、計三聯の体裁で独特の新形式に訳出した苦心は、一字一句の訳語の選択と共に、想像を絶するものがあつたものと思われる。

2 「現代詩集」(『現代日本文学全集』93巻、筑摩書房)解説

さて、上記の例は天才の生み出した傑作を天才的な翻訳者が骨身を削って訳出して、不朽の名訳と云われた、という稀有な例であり、特殊を一般化することが許されない以上、「訳詩」と云う作業がもつシビアな条件はにわかには解消しがたいものであるのは当然の事と云えよう。明治・大正期はさておき、昨今ではむしろこの逆の現象、すなわち伝統的な日本の和歌、俳句を英詩に翻訳することのほうが注目を集めているのである。はじめは、主として滞日米詩人による古典俳句の英訳が紹介されていたのが、最近ではこれに刺激されたオリジナルな Haiku の流行を生むほどになっている。比較文学者で俳句文学館国際部長である佐藤和夫氏の『俳句から Haiku へ』と題する書物が先ごろ南雲堂から出版されたが、これはその副題「米英における俳句の受容」が示す通り、日本の短詩型における曖昧性が伝統的なヨーロッパ詩学転換の大きな刺激になりうる事を指摘したものである。この分野に限って云えば、一世紀を経てようやく入超が出超に転じたと云えようか。

ではドラマの場合はどうであろうか。中村保男氏は『翻訳の技術』（中公新書345）の中で、明治以来、坪内逍遙早大教授以降、最新の小田島雄志東大教授の訳まで、十四種類の Shakespeare の *Hamlet* 日本語版があることを指摘している。これは一つには移し替えるほうの日本語の語彙の豊かさ、表現の多様性と云う事があり、又、この間一世紀に及ぶ日本語自体の激しい変化と云うものが考えられる。が結局は専門学者である翻訳者の解釈の違いがそれぞれ独自の主張となって日本語訳の上に現われて来ると云う事であり、かくて、最終的完全訳が生まれる事は永久にあり得ないのではないか、とさえ思われるのである。

さて、これほど一字一句厳密な校訂をくり返さない散文体の fiction の場合は、量的にも比較にならないものがあるが、とくに最近杜撰な仕事が多く、さまざまな形で誤訳の指摘が手厳しく行なわれている。十数冊の単

行本のほかにも、翻訳問題専門誌の訳語指摘の常設コラムまであり、プロの翻訳業界は大恐慌を来していると言われている。実際の作業は著名な翻訳家や作家の名前を表紙に掲げて多くの下訳が分担して執筆すると云う形もあろうかと思われるが、いづれにもせよ、詩、劇、小説、評論とならべて見た場合、原稿用紙とペンであろうと、ワープロであろうと、密室における個人の手作業によって翻訳されると云う事だけは共通して云える事である。

まとめて云えば、もともと文学なるものは他の造形芸術や非再現芸術と違って、言葉そのものを表現の媒体としているために、異文化の文学に接するには、直接原文に当るか、自国語版の翻訳にたよるしか方法はないわけである。そして、上にのべたごとく、その作業は単に与えられた文の単語と構造を、自国語のそれに相当する単語と構造に移しかえる、変形文法に云う mapping (ある表示のレベルを他のレベルに写像する) と呼ばれるやり方〔X〕ではなくて、原作のもつ意味が移し替えて同一になるように、つまり伝達荷を最大ならしめるように自国語におき変える方法〔Y〕であるわけである。これを更に一步押し進めると、ある原著がその社会の中で読まれ、かつ影響を与えるのと全く同じ効果を、移し替える異文化の中に於てもトータルとして生じさせるべきだという考え方〔Z〕になる。biblicist で linguist でもある Eugene A. Nida の云う “The Law of Comparable Effect” がこれに当る。原文の持つ意味、情緒、説得性を完全に理解した上で、これを変換して自国語の上に再構築しようと云うわけである。

### Ⅲ Pragmatics による翻訳

こうした、風俗、習慣、文化、宗教の違いを乗り越えて、なおかつ同じ効果を異文化の中でトータルとして再現しようとする、数千年にわたる世界的規模の努力が、各国語における聖書翻訳の事業である事に異論はない筈である。それは又すべての言語翻訳の原点でもある。紀元前八世紀以来、ヘブル語で書き続けられて来た旧約聖書が、前250年頃から通俗ギリシヤ語、コイネーに翻訳され初めて以来2300年ほどの間に、今日まで1250の地方語を含む各国語に翻訳され、地球上全人口の97%が自分の使う言葉で聖書が読めると云われている。日本語訳聖書の場合は1549年(天文18年)鹿児島に上陸したフランシスコ・ザビエルがラテン語訳聖書と共に、『マタイによる福音書』の一部の邦訳をもたらした、と云われている。また1613年ごろには、京都において新約聖書のみ全訳が出版されたとの記録もあるが、いずれの場合も現物は存在せず、幕末の1837年、ドイツ人宣教師ギュツラフによる『ヨハネによる福音書』邦訳が現存する最古のものとされている。明治7年になって、のちに同志社大学教授となる松山高吉を委員の一人とする、在日宣教師をまじえた翻訳委員会が発足、1880年(明治13年)には新約聖書、1888年(明治21年)には旧約聖書の、いずれも原語よりの完訳が出版された。その後日本語自体の急激な変化、ヨーロッパにおける聖書解釈学の急速な発達によって改訳の必要が唱えられ、1917年(大正6年)にはこれの改訳版が出されたが、世に云う文語訳聖書と云うのがこれである。その格調高い文体は当初より名訳のほまれ高く、明治期日本の思想、文化に大きな影響を及ぼしたとされている。異文化の中に原書の意味を再構築して、宗教的真理を伝達荷として伝え、伝道の目的を達すると云う点では多大の成果を収めたわけである。

その後、いかなる翻訳もそれぞれの時代の所産である以上、永久の使用に耐えられる邦訳聖書はあり得ない、という考え方から口語訳の事業が企てられ、第二次大戦中に中断していたヨーロッパの聖書解釈学の成果をも取り入れて、高橋虔同大名誉教授を委員の一人とする委員会によって、1955年(昭和30年)新旧両約口語訳聖書の完成を見た。さらに、プロテスタント、ローマ・カトリック、英国聖公会、ギリシャ正教の各宗派を超える ecumenical な翻訳も計画され、1978年(昭和53年)には、各宗派ごとに異にしていた用語の統一も考慮しつつ、超宗派の合同訳聖書も刊行されている。明治以来、数え切れない私訳、個人訳を加えると、日本語版聖書はとても十四種類の邦訳ハムレットの比ではないわけであるが、ヘブル語の旧約聖書原典、ギリシャ語の新約聖書原典のたえざる研究成果を吸収しつつ、かつキリスト教諸国家での聖書学研究と、その集中的表現である各国語訳聖書をも参照しつつ旧約39書、新約27書の一字一句に到るまで、徹底的に検討して次なる改訳に向ってやむ事なく新訳事業が進められているわけである。

そうした営々たる努力にもかかわらず、名訳とされた文語訳聖書にくらべて、戦後の口語訳は必ずしも好評であるとは言い難いものがある。かなり手厳しいのは丸谷才一氏の意見で、「口語訳は極めて劣悪である」、「平板で力点がなくて、たるみにたるんでいる駄文である」(『日本語のために』新潮文庫)と云う。実際、キリスト教内部でも、「いさゝか冗長で荘重さを欠くきらいがある」(『キリスト教大事典』教文館)、「格調が低いとの評価もある」(『聖書大辞典』キリスト新聞社)などと率直に認めている点もある。だが、2000年と云う時間と地球的空間とをへだてた場所で、語義曖昧な原典に忠実であろうとしながら、しかも宗教語がさげがたく持っている「非日常性」を平易で流暢な現代日本語で表現すると云う、全く矛盾した条件を二つながらみたと云うのはまことに至難のわざと云わねば

ならない。しかしながら、口語訳が文語訳にくらべて、戦後の世代にとっては、はるかにわかりやすいという点は、口語訳発刊直後の急速な聖書の普及が実証している。同時に、数多くの文語訳の誤りが正され、その後の聖書解釈学の成果がとり入れられて、より原文に忠実な翻訳となった事も否定しがたい事実であろう。

そこで問題は丸谷氏自身認めるごとく、現代日本語の口語体そのものがあり、「ぼくたちの時代における文体の衰弱の極端な例」の一つにすぎないのだ、とも云えるし、又、ことは文体のみの問題にとどまるものでもなからうと思われる。神その人の言動についても、文語のような「云い給えり」、「したまえり」と云う表現が使えないとなると、口語体では受身と同形の「云われた」、「された」とせざるを得ない。逆に、人が神に向って物申す場合、「云った」と云うのは宗教的にも矛盾を感じる、と云う批難も出て来る。結局、「元来、民主的な精神を呼吸している原語を、いまだに階級的色彩の強い日本語に移す事の困難さ」（前掲書）が根底に横たわっているわけである。さりとて又、「民主的な精神」にこだわりすぎて、「主の議会」（エレミア書23章18節）と云う訳し方をするのも、主の御意志が多数決によって左右されるものでない以上、いさゝか「民主々義過剰」の感をまぬかれない。ヘブル語の原語“sod”は英語訳聖書 Authorized Version が示すように、単に“assembly”の意味を示すだけであり、現に、1970年（昭和45年）発行の新改訳聖書では、「主の会議」と改められているが、戦後の一時期の風潮がこゝに反映されているのであろう。

いづれにせよ、こゝに見たものは日本語訳聖書の一世紀にわたる、相当な組織を以てする、十数度に及ぶ作業によっても、E. A. Nida の云う三番目の〔Z〕の方法は云うべくして仲々行なわれ難い、と云う事なのである。

さて、こゝで〔Z〕と云ったのは Semiotics（記号学）で云う Pragmatics（記号実践論、語用論）のことであり、社会言語学的な立場に立つもので

ある。また、さきにも述べた〔X〕の方法は Syntactics (記号統合論, 統辭論), 〔Y〕は Semantics (記号意味論, 意味論) のことで、いづれも Semiotics (記号学) と呼ばれる科学のそれぞれ三部門をなす分野を示すものである。要するに、記号伝達体, 被表示物, 解釈者, という三つの要素の組み合わせによって、記号と記号相互間の総合関係をとり上げる部門が Syntactics, 記号とそれによって示されるもの、被表示体との関係を論じるのが Semantics, そして、記号と解釈者、又は記号使用者との関係を研究するのが Pragmatics となっている。

〔X〕の場合、辞句のもつ直接的、明示的な意味を追求するのが主眼であるから denotational な attitude をとると云えるが、〔Y〕から〔Z〕に進むにつれて、言葉のより暗示的な意味が問題となって来るためにより connotational な追求の仕方とならざるを得ない。たとえば、Morse Alphabets は点と線の組合せのみによって、たゞ一箇の意味が明確に示されており、そこにはいかなる暗示、含意も介在しない。“SOS”と云う単語を英和辞書で引くと、「救難要請」、「救いを求める叫び」などと云う意味が記されているが、元来は、1912年国際無線通信会議で「最も記憶に便利で、他の符号と混同しにくいもの」として「・・・——・・・」と云うコードが救難信号として制定された、と云うだけの事である。たまたま「・・・」が「S」を、「——」が「O」をあらわす符号と偶然一致したために、この組合せを「SOS」と呼び、“Save Our Ship”とか、“Save Our Soul”, 或は“Suspend Other Service”などと語源俗解されたにすぎないのである。

云いかえると、上記の例に見られるように、popular etymology はさておき、モールス符号なるものはきわめて「コード性」の高い記号体系であり、そこにはその記号の送り手、受け手双方を含めた使用者の恣意的な解釈の入り込む余地は全くないわけである。これに対して古代社会の卜占者

はさまざまな天然現象から意味を読み取って予言を行なうわけであるが、その解釈はきわめて恣意的であり、又、時に権力者に迎合し、或はライブェルであるト占者と対抗して発言する。つまり、古代の予言などは一定の原則をももち得ない、きわめて「コード性」の低い記号体系である事がわかる。一般的には人工語と自然語がコード性の高低の対極を示す事になるわけであるが、前述の〔X〕のケースから、〔Y〕,〔Z〕と進むにつれてコード性は低くなり、その分、伝達方式が複雑さを増して行く事になるのである。

以上、コンピューターを用いて行なう機械操作にたよる翻訳作業がどのような翻訳対象に馴染むものであるのか、を検討して来たが、一般的には〔X〕の Syntactics によるもの、「コード性」の高い体系をもつもの、からスタートしようとしている事が明らかとなったわけである。

そこで次には翻訳されるべき日本語の固有の構文とその解析から進んで、さらに機械翻訳システムとの関連において可能性をさぐってみる事にしたい。